

アーカイブ 通信 No.34

No.34
2025.7.1

◆編集・発行：
ネットワーク・市民アーカイブ
<http://www.c-archive.jp/>

事務局

〒189-0012 東京都東村山市萩山町 2-6-10-1F
tel・fax：042-396-2430
E-mail：info@archive-tama.sakura.ne.jp

会員募集中

◆正会員 1 口 6,000 円、賛助会員 1 口 3,000 円 / 年
ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226
口座名：市民アーカイブ ※団体会員 2 口～

社会運動の資料を
収集・保存・公開することは
私たちを自由にしてくれる

— 模索舎アーカイブズ委員会の活動から



清原 悠

(模索舎アーカイブズ委員会(CMA)
社会学者)

◆模索舎の歴史をまとめる

新宿にあるミニコミ・自主出版物取扱書店「模索舎」は1970年10月28日に創業し、今年で創業55周年を迎える。その歴史をまとめた書籍を今年8月に刊行することが決まった(出版社は「ころから」)。2022年から制作を始めて丸3年、タイトルは『自由への終わりなき模索——新宿、ミニコミ・自主出版物取扱書店「模索舎」の半世紀』である。刊行主体は、模索舎50周年(20年)を記念する集会をきっかけに組織された、模索舎アーカイブズ委員会(模索舎とは別組織)であり、元専従会員2名(細田伸昭、安藤順)と、社会運動・出版メディア論を研究している私の合計3名で活動を行っている。



模索舎(2023年)

本書の柱となっているのは、「共同経営とは何か」という点だ。模索舎を語る言葉は数多く、曰く「ミニコミ書店」、「新左翼の書店」、「過激派の書店」、「学生運動あがりの若者が開業した書店」、「独立書店」などなどがある。それ

ネットワーク・市民アーカイブ 資料保存場所を 探しています

2014年の開館以降、当会は市民活動資料の収集・保存活動を継続してきました。知名度も広がり、開館5年目には市民アーカイブ多摩内の書庫だけでは保存しきれなくなり、21年に隣接する温室をNPO法人グリーンサンクチュアリ悠のご好意で「岸中書庫」として改裝し、バックナンバーの保存に使用させていただいてきました。

その後、緑地保全を主目的とするグリーンサンクチュアリ悠は、岸中書庫を含む一部の建物を取り壊して緑地に戻していくことになりました。

そのため、現在岸中書庫に保存中の資料(段ボール約100箱)と書架を保存するためのスペースを探しています。東京・多摩地域内で10～13㎡(4畳前後)の保存場所を提供くださる方、お心当たりの方は、ご連絡をお願いします。

に比して、「共同経営の書店」という視点はほとんど提示されてこなかった。段ボール箱にして50箱超分の資料を読み解き、多くの人にインタビューを重ね、制作主体である模索舎アーカイブズ委員会で議論を繰り返して見出した、模索舎を駆動してきたエンジンがそれである。

い。そこで、まずはお気軽に「我々」のものである公立図書館に購入依頼をかけることもに、ここは思い切って各位の年間読書費を丸ごと投入する覚悟で、清水の舞台から飛び降りるつもりで購入いただきたい。

関係者18名(延べ44名分)ものオーラルヒストリー、千点以上の歴史資料(図版、テキスト)の掲載、数百もの脚注によってオルタナティブな出版流通の歴史を明らかにする本書は、最低でも1年間は楽しめる情報量を有していることは間違いない。とはいえ、中身が全く分からないものには大枚をはたけないという声か

聞こえてきそうである。そこで、試し読みができる特設Webページを用意したので、まずはそちらで味見されたい（希望者には、内容見本紙「12ページ」も送付します）。

◆共同経営の妙味を追体験する

シェフ（编者）のオススメは、なんと言っても「共同経営」の妙味である。単なる書店論であれば、「アーカイブ通信」読者にはあまり関係ないかもしれない。しかし、社会運動はもとより、企業組合、合同会社、生協、ワーカーズコレクティブ、NPO、果ては個人事業主にいたっても、日々の活動は共同／協働によりなされている。自分1人ではなし得ないことも、他の人と協力すれば達成できる。つまり、自由を拡大させてくれる。

そして、さまざまな人との出会いと協力は、「生きててよかった」と思える瞬間を与えてくれる、人生を彩る大切な経験でもある。一方、共同／協働には常に他の人との調整が必要であり、自分1人の思い通りにはならないという点で、足かせにもなる。他の人との軋轢や確執は、人生の苦しみの素でもある。

こういったジレンマは、多くの人が経験しているはずだ。

これに加え、上意下達ではない形（平場の関係）で活動を回していくという要件が入り、さらに資金繰りが伴う「経営」ともなれば、その困難さは大変なものになる。そういったことに思い当たる人にこそ、本書をぜひ読んでほしいと思う。

模索舎は創業時より共同経営を実践してきた。専従舎員はおおよそ5年ぐらいのサイクルで世代交代を重ね続け、現在も新宿の地で営業を続けている。「自由への終わりなき模索」がどのように継承されてきたのか、それを読むことで、読者が自分自身の経験を振り返る際の羅針盤となるのではない。そんな思いを込めて編集をしたのが本書である。

◆市民活動資料のもつ力

もう1つ、模索舎アーカイブズ委員会の活動を通して気がついたこと、考えてきたこととして、「市民活動の資料を保存・収集・公開することにはどのような意味があるか」ということを以下に述べておきたい。

本書を制作するにあたって最も頼りとしたのは、模索舎創業者の1人である五味正彦氏（13年逝去）が所有していた資料群である。この資料群は五味さんが亡くなった後、社会学

五味正彦『アーカイブズ用メモ』ノット（立教大学共生社会研究センター所蔵）。五味さんが晩年、市民活動の資料を保存・収集するためのアーカイブズ活動に取り組んでいた様子がうかがえる資料である。



者の道場親信氏（16年逝去）が音頭を取り、アンティ多摩の江頭晃子氏、立教大学共生社会研究センターの平野泉氏、元模索舎専従舎員（現CMA）の細田伸昭氏、船津かおり氏が遺族とともに協力し、保存活動に取り組んだ（私もその端くれにいた1人である）。元々は段ボール箱200箱ほどあったものを整理して57箱にまで縮減し、幸いにも立教大学共生社会研究センターに寄贈することができた（「五味正彦コレクション」として登録され、現在はまだ整理中ではあるが閲覧可能）。その資料群を活用し、22年夏より模索舎の関係者にインタビュ調査を行ってきた。

資料が持つ力というのは不思議なものである。忘れていた思い出を引き出してくれるだけではない。活動当時は渦

中であって分からなかった諸事情が、資料を通して理解されることによって、過去に抱いた感情が更新されていく。

たとえば、模索舎の歴代舎員の中には、模索舎の歴史を本としてまとめたり、アーカイブズとして公開することには否定的であった方も少なからずいたが、「五味正彦コレクション」を活用したインタビュのやり取りを経て、活動を振り返ることの重要性を認識してくれるケースは少なくなかった。結果として、インタビュに答えてくれた方は全員、本書の制作に協力してくださった。過去の確執、悔恨、そういった負の感情が、新たな文脈に載せられることで、別様の経験として理解され直すのである。当時は言葉にできなかった、もやもやとした思いが、時を経て、他者の言葉に触れることで、初めて言語化されることも大いにあったように思う。

◆資料を共有し、公開する意味

また、「資料」を持つているということが、活動時においてどのような「権力」を発揮していたのかという点も重要な論点であることにも気がついた。

たとえば、五味さんは小学校の卒業文集から資料を保存し

ており、比喻ではなく段ボール200箱分の資料とともに暮らしてきた。生活空間を圧迫する負担を負ってまでも遺してくれたことには畏敬の念を抱くが、それは単なる慈善活動ではない。模索舎に関する多くの資料を五味さんが所有（私有）することによって、彼は模索舎の歴史の「唯一」の語り手となることができるだけでなく、ほかの舎員とのコミュニケーションにおいても発言力・交渉力の面で優位に立つことが可能となっていた。

とりわけ、1987年に五味さんが新たに「ほんコミニケート社」——書店では手に入りにくい少数の本やパンフレットなどを流通させるための取次会社——をつくって模索舎を退舎するが、その後も後継世代との間でさまざまな折衝があった時がそうである。退職金の交渉に始まり、ほんコミニケート社と模索舎の間での取引条件の交渉、さらには現・模索舎の商売のやり方にも口を出すなど、五味さんが後継世代を振り回すことが退職してから10年近く続いた。その現場に立ち会った90年代専従舎員の1人である安藤順（現CMA）は、五味さんと後継世代との間にあった交渉力の

差の由来が、資料群を持ってい
るかどうかの差であつたこと
に、本書の制作を通して気がつ
いていった。

資料を私有から解き放ち、共
有財産として保存し、公開する
ことは、運動体内にあった発言
力の格差を、事後的にではあれ
フラットにしていくなかで効果を持っ
ているということである。それ
は、発言力の格差から生まれる
抑圧を、解放する機会ともなる
のである。

資料を収集し、保存し、公開す
る意義とは、単なる事実の集積
を明らかにするということだけで
はないこと、市民アーカイブ多摩
はそのことを大切にしてきた

ことを、私は中村修、杉山弘から
学んだ(参考文献)。本書のそこ
かしこに、市民アーカイブ多摩
の活動に響き合うものが、きつ
とあるに違いない。本書からど
のような考えが浮かぶか、市民
アーカイブ多摩の皆さんと語ら
う日が来ることを楽しみにしな
がら、本書の刊行にむけてラス
トスパートをかけていきたい。

(きよはら・ゆう)

参考文献

・中村修「市民アーカイブ多摩につ
いて」その前史から現在まで」
『アーカイブズ学研究』22巻、
2015年
・杉山弘「アーカイブズをつくり育
てる市民運動」『社会運動史研究
3』新曜社、2021年

自由への終わりなき模索

新宿・ミニコミ・小流通出版物取扱書店「模索舎」の半世紀

目次 (2025年4月現在)

清原悠 編集 A5判 864ページ
978-4-907239-78-7 C0036

序論	「模索舎」の歴史と理念
第1章 模索舎の創設者たち(1968)	・小島正徳・小林健 前編 模索舎のバックボーンにあるもの ・小島正徳・小林健 後編 「多様性の統一」を目指す ・小島正徳・小林健 後編 「自由主義主義者」(後編)と出版活動
第2章 模索舎運動の始まり(1968-1972)	・小島正徳・小林健 前編 模索舎の始まりと理念 ・小島正徳・小林健 後編 模索舎の活動と理念
第3章 模索舎運動の発展(1972-1979)	・小島正徳・小林健 前編 模索舎の発展と理念 ・小島正徳・小林健 後編 模索舎の活動と理念

* 7月15日までは予約販売で5500円にて購入可
<http://korocolor.com/news/202505-mosaku-yoyaku.html>



ネットワーク・市民アーカイブ2025総会報告

6月8日(日)

10時30分から11
時30分まで、25年
度定期総会を開
催しました。正
会員20人(委任状
21人)、賛助会員
1人の参加があ
りました。



24年度の活動
報告として、①N
PO法人化の準
備、②目録刊行準
備、③市民活動資
料に関わるさま
ざまな機会を模
索したこと。さ
らに市民活動資
料収集・保存、
開館業務、催しや
通信発行の継続の報告。続け
て決算について運営委員から
報告がありました。会員から
は、活動報告に加え、長期展覧
や年度目標の中で、現在の立
ち位置が分かるような記載の
必要性の指摘がありました。

25年度事業計画は例年通り
の活動に加え、①NPO法人
化、②募金運動の準備、③目録
刊行、④多様な参加を
継続的に模索してい
くことなどが提案さ
れました。活動予算
は、目録作成、募金準
備のための謝礼金支
出などを増額した案
を提示。会員からは、
公共図書館などとの
連携や提言活動への
期待の声が上がり、い
ずれの議案も承認さ
れました。

NPO法人設立総会

続いて11時30分から12時30
分まで、NPO法人設立総会
を開催しました。出席者21人
(委任状21人)。

最初に設立趣意書を読み上

げ、設立を承認。その後、定
款、2年分の事業計画・予算
(一部誤記修正)、設立当初の
財産、役員・設立代表者選任
と続きました。

25年度はNPO法人設立が
年度末近くになるため、任意
団体としてのみ活動し、26年
度からNPO法人として活動
すること、役員は任意団体の
運営委員・監事が25・26年度
の理事・監事となり、設立代
表者を増沢航とすることが承
認されました。

議案は承認されましたが、
参加者からは定款について
活発な意見交換が行われまし
た。総会における会員のさま
ざまな参加方法(書面やオン
ラインなど)、意見表明の場を
保障しつつ積極的な議論がで
きる体制の整え方、最初の理
事会の召集方法……など具体
的な提案がありました。

06年の当会発足以降、何度
も法人化の議論・書類準備を
しては中断してきましたが、
19年目にしてNPO法人格申
請の手続きに入ることに
なりました。NPO法人という組
織を利用しつつ、市民活動資
料収集・保存への個々の自由
な思いを第一に続けていきま
す。(江頭晃子=事務局・運営委員)

ニコミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信(ミニコミ)を、発行者の方に紹介していただきます。

監視団ニュース

1972年8月5日未明、ベトナムの戦地に送られようとしていた米軍の戦車の通行が止められた。横浜市が重量制限を超える車両の通行を許可しなかったからだ。

48時間後、戦車は修理元の相模補給廠へとUターンしてきた。直後、戦車の再搬出を止めようと、補給廠正門(西門)前に政党、労働組合、学生団体、市民団体のデモが立ち並んだ。その年の夏、現場周辺には毎夜、市民がやって来てはデモに陣取った学生、労働者と集う不思議な空間が出現した。その年の11月8日、車両制限



- 1977年創刊、月刊、500部、B4判、10頁前後/年間購読2000円
- tel : 042-756-9460/E-mail:kickoff-swdmsj@jcom.home.ne.jp
- 当館所蔵 : 399号(2010.6.8) ~
- ▷ 578号(2025.5) =編集前記、補給廠近況(陸軍部隊出店、真新しいコンテナ群他)、R7県内基地業務発注予定一覧他

ペン

東京町田ペンクラブの前身である「町田ペンの会」が「学問・芸術に深いかわりと関心を持つ人びと」を会員とし、「地域文化の向上」を目的にして誕生したのは、1976年10月。初代会長は文学散歩などで知られる野田宇太郎であった。

「ペン」とは、詩人のP、編集者・エッセイストのE、小説家のNを並べたものだが、そこには「文化にとつてもっとも大切な詩」Pを重視したいとの野田の考えが反映されていた。その後、会は2011年に「東京町田ペンクラブ」と改称し、現在に

めに斗っていこうとする人々との交流の場となることを望みます。皆20歳代、前口上がいかにも若い……。

以来48年余、ガリ版刷りから始まったニュースの発行は今も続いている。毎月第2火曜の定期発行で、本年5月で578号を数えている。編集前記に始まり、相模補給廠など近隣基地群の動きに主な紙面を割き、締めは「沖縄地元紙社説を読む」で、だいたいB4判10ページ立てである。

皆70歳代、いつまで出せるか心許ないが、まだ暫くは続けるつもり……。(沢田政司)



- 1976年創刊、年4回、300部、B5判、24頁、町田市立図書館などで無料配布
- E-mail : st3jin@k5.dion.ne.jp (駒田和幸)
- 当館所蔵 : 150号(2015.1.1) ~
- ▷ 191号(2025.4) =特集 : 町田ゆかりの人びと(寺田和雄前市長と町田市民文学館、町田市における地域文庫活動の誕生、山代巴)、活動紹介、報告他

至っている。会の活動として、ある分野で特筆すべき活動などに取り組んでいる会員から講演をしてもらうことなどを行っているが、日常的には年4回(1・4・7・10月)の会報『ペン』発行が主である。

これまで会報はほぼ会員の原稿で編集されてきたが、会員が高齢化し、旅立たれる方が増えてくる中で、しだいに(特に2020年代に入ってから)会員外の方から寄稿をお願いせざるを得なくなった。それは見方を変えれば、会報が同人誌的な性格から脱却していくことでもあった。

ところで、2000年代に入ってネットメディアが大きくなり、影響力を持つようになったが、小会はサイバー空間では情報発信をしておらず、会報がすべてである。以前、ネット上に存在しないものは存在していないとみなされると言われたことがある。確かに老若男女を問わず、ほとんどの人がスマホを片時も

手放さずに生活している現状を考えれば、そうなのかもしれない。しかし、画面上を瞬間的に流れていくだけの情報よりも、編集・校正など熟慮を重ねた上で責任の所在を明記し、紙媒体という保存できる形で発行される会報は捨てたものではないと思っている。

17世紀フランスの思想家ブレイズ・パスカルの言葉を借りると、現代は「われわれは絶壁が見えないようにするために、何か目をささげるものを前方に置いた後、安心して絶壁のほうに走っている」(『エッセー』)ように見受けられる。それだけに「目をささげるもの」の正体を明らかにし、「絶壁」の存在に気づかせてくれる、洞察力のある、滋味あふれる文章を20ページあまりの小さな会報にこれからも掲載していきたい。

最新192号は、谷川俊太郎、砂川闘争70年を特集している。お手に取っていただければ幸いです。(駒田和幸)

ゆるやかに市民活動資料に触れ続ける

高江洲昌哉（神奈川県立神奈川大学）



正直に書くと、自分は市民活動資料に関して、積極的な作り手（市民活動資料を生み出す側）というわけではないし、積極的な消費者（この分野を専門に研究している）というわけでもない。しかしながら、ネットワーク・市民アーカイブ賛助会員としてのつながりもあるので、市民活動資料とまったく無縁というわけでもない。こうした、つかず離れずの距離感で市民活動資料と関わってきた。この関わりから書いていきたい。

◆法政大学環境アーカイブズから

私と市民活動資料との出会いは、法政大学の環境アーカイブズのRA（リサーチ・アシスタント）として、「東京都立多摩社会教育会館旧市民活動サービスコーナー（以下「コーナー」と略記）が収集していた膨大な図書類の受入関係に関わったことに始まる。

もともと図書類の目録作業は別の方が対応しており、私は受け入れに際して話し合いなどに参加した程度である。また、私が関わったのは初期段階のため、特記すべき事柄をもって

はいないが、コーナーの資料は2021年には公開に至っている（現状については、『大原社会問題研究所雑誌』777号（23年7月）を参照のこと）。

私が在職していた時期に杉山弘さん、五味正彦さん、江頭晃子さんなどが話し合いや目録整理に参加していた。五味さんから「ミニコミ雑誌に関するレクチャーを受けたこともあった。

◆過去と現在、2つの入口

個人的には、環境アーカイブズのRAを退職したあとも、いわゆる市民活動に関する資料とは不思議な縁でつながってきた。

1点目は、自治体史関連である。私は近代史部会に属しているの時代は違うが、『立川市史』に関わっている関係もあり、砂川事件について考える機会もあった。その他の事情などもあり、『砂川平和ひろば』の一読者として現在進行形の市民活動資料に接している。

2点目は、伊江島の阿波根昌鴻の資料整理作業に参加して目録データの作成に関わってきたことだ。そのため、阿波根の所に届く、いわゆるミニコミなど

市民活動資料に目を通すことがある（後述の部分と関わるので、参考のために書くと、阿波根資料にあるミニコミなどは、同じものでも違うところにあれば、違うアイテムとして目録化している）。

◆図書目録とアーカイブズ学の間

さて、こうした乏しいつながりを述べるだけでは、いただいたコラムの文章としては心もとないで、最後に、職責から考えると相応しい立場ではないが、関わった関係で環境アーカイブズのコーナーのミニコミに関する目録の補足説明をしたい。

この目録は、図書分類に馴染んだ目から見ると、脈絡が分からない配列になっている。概要説明によると「目録は、ファイルごとに作成主体、巻号、年次を記録した。このとき、原則として箱詰めされた際の資料の順番を尊重した」（資料群概要6コマ目）と書いてある。この点を補足すると、アーカイブズ学には

「原秩序維持」という方針があるので、それを「援用」し、箱に付けられた番号の順番にそって目録を作成したといえる。

ちなみに、環境アーカイブズのミニコミ目録にはコーナーが内容で分けた分類番号を「旧分類番号」として付しているの、どのような内容なのか、分かるようになってきている（エクセルデータの旧分類番号を並び替えると、もとの配列が分かる）。資

料を探す入り口に当たる目録もそれぞれの方針があり、「内容分類」という目録と、「原秩序維持」という目録という、目録の背景にある方針の違いが分からないと、戸惑うこともある。

（たかえす・まさや Ⅱ 会員）

市民アーカイブ多摩の四季 ② 夏 ノウゼンカズラ

鮮やかな花が次々と咲き始め、蜂が飛び始めると、今年の夏の暑さを想像してしまします。



中国南東部原産の落葉性の大型つる性木本で、花を観賞する目的で植えられますが、どんな大きくなって壁に貼り付いたり木によじ登ったりするので、敬遠されることもあります。葉はフジの葉と同じような形（奇数羽状複葉）をしており、小葉の縁に鋸歯があります。花はラッパ状で直径5cmぐらいあり、濃いオレンジ色をしていて、垂れ下がった枝先に間をおいて10個ぐらいつきまです。ノウゼンカズラ属には2種しかなく、もう1種は北アメリカ原産のアメリカノウゼン

カズラです。こちらもよく栽培されていますが、筒状で朱赤色の花が枝先に集まってつきまです。一般に昆虫は赤色が識別できない（アゲハチョウは識別できる）ので、このような色と形をした花は、原産地では鳥が訪れて花粉を運んでいると考えられます。そのせいか、日本ではノウゼンカズラの果実はほとんど見られないようです。

（邑田仁Ⅱ元東大小石川植物園園長）

第11期 緑蔭トーク報告

第1回 5月25日

市民運動に動画を活かす

—映像記録の意義と活用事例—

早川由美子

(ドキュメンタリー
映画監督)



し、以降も映像作品を撮り続けてきた。

◆市民団体が動画配信する意味

いわゆるマスメディアは、最初はニュースに取り上げるが、あとはせいぜい節目に取り上げるのみということが多く、そこで取材してもらうだけでなく、自分たちで発信するのも大事だと思う。

市民団体が自ら動画を撮る良さは①構えない自然体の映像が撮れる、②当事者の声をそのまま届けることができるということにある。一方で、①他者のチェックが無い怖さ、②営利的なプラットフォームに頼る限界というデメリットもある。

動画配信ではYouTube、Facebook、X、Instagram、

「 TikTok」などが無料で利用できるため、それぞれ広く使われているが、各プラットフォームはあくまでビジネスなので表現の自由や報道の意義などに興味はない。違反動画として通報されると、ほとんどなんのチェックもなく削除されてしまう。その決定経過は不明のまま。そのため、バックアップはとても大事になる。

文字でも映像でも歴史に残るのは高い地位、声の大きい人であった。名もなき人の声を残すことこそ市民運動のなせることではないだろうか。ぜひ市民運動の記録を残していただければと思う。

今回の緑蔭トークでは、早川さんが撮りためた映像作品なども少しずつ鑑賞していった。公開されているものだけでなく、未公開の動画も鑑賞しながら、動画撮影の醍醐味を紹介いただいた。また、報告の後、質疑応答では、市民アーカイブを動画紹介するためのポイントや映像許諾、広報活動、世代間の動画作成の違いなど、活発に議論が交わされた。

(記・増沢航代表)

◆「ジャーナリスト」をめざして

もともと映画監督になろうとは思っていたわけではなかった。ある日、通勤途中に仕切りがあったり、チューブ状になっていたりと、座りにくいベンチが目についた。それは後にホームレス対策によるものと分かる。けれど、これでは問題解決にならないのではないかと思い、野宿している人100人くらいにインタビューして記事にまとめた。新聞各社に送ったが、記者でない人の記事は受け入れてもらえないと知った。

当時、韓国の市民メディアの「オーマイニュース」が日本でも始まったことをたまたまラジオで知り、そこに記事を掲載することにした。すると「ホームレスは自己責任」「路上に寝てる奴が悪い」などと予想外に炎上。この様子がTVのニュース番組の目に留まり、4日間10時間の

取材を受け、5分だけのニュースとして放映された。こうした体験を通して、映像はより多くの人に伝えることができることが分かった。

そこでジャーナリストを志し、2007年に5万円くらいの小さいビデオカメラを購入。動画を撮り始めることに決め、ジャーナリズムを学ぶためにイギリスに留学することにした。その際、国会前広場で01年からイラクへの経済制裁・対テロ攻撃反対の座り込みをしていたブライアン・ホウさんと会う。日本ならず撤去となるであろう光景に、なぜこのような運動をしているのだらうと思い、取材を始め、制作したのが第1作の『ブライアンと仲間たち』(09年)である。

この作品を手にも日本に帰国

第1期 緑蔭トーク

◆第3回 7月26日(土)

コミュニティの中からコミュニティへ

—新宿二丁目お宝のエイズ対策

岩橋恒太さん(NPO法人akko)

◆第4回 9月27日(土)

感情のアーカイヴをつくる

—ミニコミとnoteと自分を書く／読むこと

家人祐輔さん(書籍編集者)

会場：市民アーカイブ多摩(8頁)

時間：午後4時15分～6時

定員：30人(要申込・先着順)・3000円

・042-396-2430 / info@archive-tama.sakura.ne.jp



会員からNPO法人化への声

・NPO法人として今後いろいろと書類作成や都への報告など、煩わしいことが増えると思いますが、なんとか乗り越えてください。

・敗戦から80年、「昭和100年」という年を迎えました。市民がどんな軌跡を刻んできたかを、しっかり検証することが大切。ネットワーク・市民アーカイブの果たす役割もさらに大きくなります。がんばりましょう。

・法人化の成功を祈ります。

・法人化への作業大変だったのではないでしょうが、更に活動しやすくなると思います。

・NPO法人という大きな一歩を踏み出すにあたって、大変な苦労様でした。これからメンバーがだんだんと若い層へと変わっていくかなければならないということも感じながら、どのように裾野をひろげていくのか、考える機会に総会がなることを願っています。



市民アーカイブ多摩 春まつり報告

最初に運営委員の増沢航が2007年に創刊して5月に60号を発行する八王子の情報誌『はちとび』を紹介。

次に大橋奈緒子さんと村上正樹さんが『府中萬歩記』を紹介。13年創刊、現在133号。府中の市民活動などの紹介記事のほか、トランス女性の経験や天皇制といった大きなテーマもカバーしているのがポイントとのこと。

松野哲二さんと上野哲さんからは、1998年に結成した「チマ・チョゴリ友の会」が27年間で132号不定期刊行してきた『チマ友にゆうず』を紹介。日本人、在日朝鮮人が一緒に関わることを大切に編集していること。また、自身の名刺そのものが活動を紹介する小さなミニコミの役割を果たしているとのこと。

市民アーカイブ多摩のことをもっと広く、多くの人に知ってもらいたい！ そんな思いで今春「市民アーカイブ多摩 春まつり」を開催。見学会やグリーンサンクチュアリ悠の樹林散策、ミニコミ紹介会などを通して参加者が思い思いに「市民アーカイブ多摩」を楽しめるような企画を用意しました。参加者32名各々気の向くまま参加できる工夫を凝らし、この1日は自由な雰囲気があふれていました。（記・編集部）

◆ミニコミトーク

その中でも中心的な企画が「ミニコミ紹介」です。ミニコミづくりに関わってきた方々が集まり、「私の好きなor作ったミニコミ紹介」というテーマで活発に意見を交わしました。

きなこととをみんなで共有することが目的との話がありました。

戸井田久美子さんは、森林ボランティアの活動「そらあけの会」の会報「そらあけだより」を紹介。メンバー間の通信のため、市民アーカイブ多摩に保存するか否かの議論を通して、会として大切にしている活動内容を確認する機会になったエピソードも紹介されました。

林喜代三さんからは、45年以上発行し続けている『目高舎通信』の紹介。マスコミと違って「ミニコミは自由だ」と言われた時代に始め、いわば「ミニコミ世代の生き残り」と一言。中原里美さんは、70年、高校生のとときに『くそつたれ！』と



いうガリ版刷りのミニコミを作っていたことから、現在まで続く活動について話されました。当時は多様な団体があったものの、団体とは馴染まない人が、個人的にミニコミを出すことが多かったと言います。集会で配ったり、駅前に座って1部いくらで売っていたりという時代を振り返りました。

意見交換会では、SNS発信と紙媒体の違いや自治体史の編纂との関わりなど、次から次へと質問や議題が提起され、ミニコミ本体も含めた、さまざまな考えや発行方法について意見が交わされました。

◆NPO法人設立総会に向けて

ミニコミトーク終了後、当会がNPO法人化するにあたって検討している「設立趣意書・定款(案)」の説明と意見交換会を開催しました。

まず、これまでの会のNPO法人化に向けた議論の経過報告をしました。最初に議論が始まったのは11年。NPO法人化プロジェクトが発足(13年)したものの開館準備に追われて実現しなかったこと。

再検討を始めた(17年)が、運営委員全員の賛同が得られず再度棚上げとなったこと。そして今回のNPO法人化議論は



23年から再スタート。運営委員が全員一致してから動き始め、会員アンケートを2回開催し、広く意見を募りながら案も作り上げた…などの報告をしました。

続いて、設立趣意書を読み上げ、定款案を説明。原案に概ね賛同いただきましたが、法人名称については活発な議論(施設名である「市民アーカイブ多摩」を団体名とする案など)が行われました。

◆緑地散策・ミニコミ即売も

当日は春の花満開の樹林地散策会、市民アーカイブ多摩の案内、ミニコミ即売会も行いました。これからもミニコミと緑地を媒介に、さまざまな人とつながっていきける催しを企画していきます。

アーカイブ多摩 目録

◇2024年度データ

24年度事業のうち、実績データを一部ご紹介いたします。①開館日72日。②来館者数205人。③データ入力数4194点。④新ファイル作成数74タイトル。⑤ファイル総数2188タイトル。来館者・ボランティア・当番を含めると540人の来館がありました。

◇分類変更に着手

市民アーカイブ多摩では、資料の活動分野ごとに分類して配架しています。1つの分類枠に入れたくないという葛藤を抱えつつ、資料群として活用しやすい方法を模索してきました。時代とともに市民活動の裾野は広がったり変化しており、悩みながらも一部分野の分類変更に着手しました。

◇新目録刊行に向けて

25年度中の刊行を目指し、目録作りをすすめています。各ミニコミの現物とデータ照合、法政大学環境アーカイブズとの継続の確認、通信掲載記事の整理などを行っています。

◇部会プロジェクトメンバー、資料整理ボランティア募集

25年度は部会2つ（企画部・記録部）等企画、広報部会・通信やパンフレット・HP更新。プロジェクト3つ（長期計画・目録作成・ミニコミを読む会）が動き出します。隔月程度で開催しています。会員でしたらどなたも参加大歓迎。資料整理ボランティアも募集中です。ご一緒にくださる方、事務局までご連絡ください。

◇夏季休館

8月9日(土)、13日(水)、は休館日となります。

運営委員会など

2月21日 第11回運営委員会、参加者8人。会員・カンパ者、当番予定、来館者、各部会から報告(以下毎回)。春まつり検討、定款案・理事覚書検討、総会記念講演チラシ確認、25年度活動の柱、グリーンサンクチュアリ悠から連絡等。
3月21日 第12回運営委員会、参加8人、オンライン傍聴1人。24年度活動反省・報告、25年度活動計画、新役員依頼候補、理事覚書、春まつり役割分担・設計者依頼、通信次号内容検討他。
3月30日 春まつり開催。参加32人。
4月18日 第1回運営委員会、参加者6人。春まつり反省、緑蔭トーク①役割分担、25年度役員体制・オンライン参加検討、24年決算・25年予算案確認、助成金報告、設計図作成依頼予算検討他。
5月10日 緑蔭トーク①開催(話し手：早川由美子さん)。参加者17人。
5月14日 第2回運営委員会、参加者7人、傍聴参加2人(うちオンライン1人)。緑蔭トーク①反省、分類変更案確認、総会・記念講演会役割分担、設計依頼状況報告、助成金結果報告他。

会員数(2025年5月)

171(正会員67人
賛助会員98人・6団体)
◆新規入会ありがとうございました
(賛助会員)
高野弘之さん 六鹿篤美さん

カンパありがとう

(2025年2~5月)

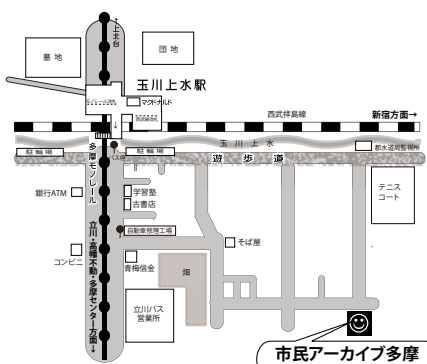
新井勝紘さん 池谷キワ子さん
奥田さざきさん 尾崎保夫さん
川上和子さん 駒田和幸さん
澁谷朋恵さん 鈴木美和子さん
住田啓子さん 富窪高志さん
中村光一さん 野村まり子さん
平野 泉さん 堀内寛雄さん
町村敬志さん 松井隆志さん
六鹿篤美さん 山口真理子さん
横田忠夫さん 鷲尾真由美さん
渡辺 樹さん 渡邊康弘さん
匿名2人

会員の声

・貴会が記録を残しているだけでなく、記録を創っていることに敬服しています。
・武蔵村山市教育委員会が『武蔵村山の戦跡』を発売しています。
・毎年丁寧な総会資料で活動がよく分かります。会費を払うだけ会員ですが、読ませてもらっています。
・いつも興味深い学習会を企画してくださり、ありがとうございます。
・記念講演会にすばらしい講師を企画してくださり感謝。
・ネットワーク・市民アーカイブも新たな一歩を踏み出すのですね！

編集後記

吉田裕氏の講演「アーカイブズと戦争」を間近で伺えた。「兵籍簿」や「軍歴証明」の存在、これらは大変重要な基礎データであるのに不備や行方不明が多数あることも知った。(吉・増・江・鈴・大)



【市民アーカイブ多摩利用案内】

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(8月9・13日休館)
- ・開館時間：午後1時～4時 ・入館カンパ：100円～
- ・所在地：東京都立川市幸町5-9-6-7
(多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩10分)
- ・tel・fax：042-536-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：市民団体や個人が発行するミニコミ (通信や会報等)
- ◆会員・カンパ募集中 ～市民の活動を過去・現在・未来につないでください～
・正会員1口6,000円/年 ・賛助会員1口3,000円/年 ※団体会員2口～
ゆうちょ銀行 振替口座00120-9-729226 口座名：市民アーカイブ
※他銀行から ○一九(ゼロイチキュー)店(019)当座 0729226